

鬼瓦のルーツを尋ねて 韓国へ (32)

前橋市 富山 弘毅

鬼瓦のルーツをたどっていくと、韓国の博物館などで大事に保存してある中国出土の鬼面瓦に注目せざるを得ません。

それらのほとんどは「鬼瓦」というより「鬼面文瓦当」（軒丸瓦、軒平瓦）です。半分の「半瓦当」もかなりあります。

それらは貴重な文化財で、朝鮮半島や日本の収集家・研究者が丹念に集めたものですが、その数はものすごく多いというほどではありません。

では、いまの中国でこの種の瓦はどう扱われているのでしょうか。また現在の建物の屋根にどう載っているのでしょうか。

中国の屋根瓦を初めて見た

初めて中国を旅したのは 2001 年の夏でした。近畿日本ツーリスト（当時）のホリデイという 8 日間ツアーで、上海—桂林—西安—北京を駆け足で回る、忙しいコースでした。

ちょっとこの路地を探検してみようとか、この寺の裏に入り込んでみようかなどというゆとりは、まったくありませんでした。

瓦の写真を撮っても正確に記録する暇がないことも多く、あとで記憶に頼ることもありましたから、本稿での写真説明も不正確な部分があるかもしれません。



上海 豫園 門

上海・豫園で関羽と張飛

最初の訪問地・上海では、観光名所の豫園（よえん）＝明代に造営された庭園＝で、美しい建物にみごとな瓦が載っていました。

まずびっくりしたのは、ガイドが「左が関羽（かんう）、右が張飛（ちょうひ）です」と説明してくれた、この大きな飾り瓦です。かつて拙稿⑩で絶賛してご紹介した大阪市・法蔵院山門大棟の龍と鐘馗（しょうき）と子鬼のすばらしい瓦芸術作品も、これにはかないません。



上海 豫園 (上) 関羽 (下) 張飛



『三国志』（陳寿著）によれば、関羽（219 年没）も張飛（221 年没）も後漢末期・三国時代の蜀（しよく）の国の将軍でした。蜀の創始者・劉備に仕え、その人

並み外れた武勇や義理を重んじる人柄は敵の曹操や多くの同時代人から称賛されました。黄巾の乱が起きると、二人は劉備の護衛官を務め、劉備は関羽・張飛に恩愛をかけました。張飛は関羽が年長者であることから兄のように従ったといえます。

二人は一世を風靡する剛勇の持ち主で、「張・関を従えれば大事業も成せる」と、天下に広く評価されました。

しかし、関羽は剛毅が行き過ぎて傲慢だったといえます。また張飛は乱暴で部下に恩愛をかける配慮が無く、反逆した部下に殺されました。

関羽は捕虜となり斬首されるという悲劇的な死を遂げましたが、後世、神格化されて47人目の神とされました。信義に厚い事などから、現在では商売の神として世界中の中華街で祭られています。ソロバンを発明したという伝説もあるそうです。



上海 豫園 龍壁

豫園にはこのほか、いくつも珍しい瓦がありました。もっとていねいに歩けばさらに多くの芸術瓦を発見できたでしょう。それを見にもう一度行きたいものです。

西安・大雁塔に人面瓦

上海から飛行機で2時間、桂林に飛んで一泊。「水墨画のようだ」といわれる景勝の漓江(りこう)下りを楽しみましたし、桃源郷にも案内されましたが、鬼瓦の面ではまったく収穫がありませんでした。

桂林から空路2時間で着いたのが、陝西(せんせい)省の省都・西安。

かつて中国古代の諸王朝の都であった長安(ちょうあん)です。西周から秦、漢、隋、唐など十数の王朝の都として2千年余の歴史をもつ古都です。安倍仲麻呂や空海も命がけてここを目指したのでした。今も、人口650万人の大都市で、郊外には広大な工業地区があります。

巨大なシンボルがいやでも目にはいります。西安最大の大雁塔です。四角錐体で高さ64メートルの唐代の古塔。648年に高宗が亡母のために建てたとされ、高僧・玄奘法師がインドから持ち帰った法典を納めたそうです。

息を切らしながらなんとか最上階まで上り、西安随一という四方の眺めを楽しみました。眼下にはみやげ物店が軒を連ね、往時もこうだったかなと思わせました。

塔内に、数は少なかったのですが、瓦の展示があり、貴重な人面紋半瓦当の逸品を発見しました。韓国で見たものとそっくりでした。



西安 大雁塔内展示 人面紋半瓦当
戦国BC475~221 または秦BC221~206

兵馬俑で鬼面瓦？発見

西安の北東部の農村風景の中に小山があって、これが秦(紀元前221~同206年)の始皇帝陵。中国最初の皇帝といわれる始皇帝の墓です。司馬遷の『史記』によれば、この陵の下には3層の水脈を掘りぬいてつくった宮殿があり、宝物とともに帝の柩が安置されているとされます。

この陵を守る近衛軍団の副葬坑というのが兵馬俑(へいばよう)です。帝陵の西1.5キロにある巨大なドームが兵馬俑博

物館で、ユネスコの世界遺産です。

井戸を掘ろうとした農夫によってたまたま発見されたのが 1974 年。地下 5~6メートルに実物大の兵士、馬、文官や芸人などの俑(よう=死者とともに埋葬した人形。殉葬に代わるもの)だけでなく、馬車や宮殿などもあります。実物大のレプリカで、すでに発見されたものだけで 6,000 体を超え、同じ顔の人形はないと言います。

圧倒されて声も出ません。

生前の始皇帝の生活そのものを来世に持って行こうとしたものらしいのです。現在の技術では俑に彩色された顔料が酸化することを防止できないことから、事実上、発掘は停止された状態にあるといえます。

ここで「鬼面瓦」または「獣面瓦」らしきものを発見しました。発掘された秦の時代の塼と軒丸瓦でしょう。



西安 兵馬俑出土の塼と鬼面文軒丸瓦
兵馬俑博物館内

西安の中心部は城壁に囲まれています。その西の城門で、鬼面らしい軒丸瓦を見つけました。



西安 西の城門 鬼面紋軒丸瓦



西安 西の城門
鬼面紋軒丸瓦

北京の故宮はもっぱら龍

西安から 2 時間の飛行で北京へ。万里の長城の八達嶺を歩いて、中国の悠久の歴史と壮大な国土を実感しました。

そして、天安門広場から故宮(こきゅう)=紫禁城(しきんじょう)へ入りました。ここは明・清朝の旧王宮である歴史的建造物。「北京と瀋陽の明・清王朝皇宮」の一つとしてユネスコの世界遺産(文化遺産)となっています。面積は 725,000m²あり、世界最大の宮殿の遺構です。



北京 故宮 鬼龍子

この宮殿は、元がつくったものを明の成祖永楽帝が 1406 年から改築し、1421 年に南京から北京へ都を遷してから、清朝滅亡まで宮殿として使われました。

1644 年の李自成の乱で明代の紫禁城は焼失しましたが、李自成の立てた順朝を滅ぼし北京に入城した清朝によって再建され、清朝の皇宮として皇帝とその一族が

居住するとともに、政治の中心舞台となりました。



北京 故宮 鬼龍子（上下とも）



ここに住んだ最後の皇帝は愛新覺羅溥儀。彼はわずか2歳10か月で1908年12月、皇帝に即位させられ、清朝の第12代宣統帝となりました。1911年10月に辛亥革命が起き、袁世凱の求めを受けて1912年2月に溥儀は退位しましたが、中華民国臨時政府の「優待条件」として溥儀とその一族は、紫禁城の内廷での居住を許されました。しかし1924年10月の馮玉祥による北京政変の際、11月5日を以って溥儀を初めとする皇族の紫禁城退去が通告されました。

その後は**故宮**と呼ばれ、ルーヴル美術館などの例にならい1925年10月10日に博物館として組織されたそうです。

故宮の屋根は真っ黄色

広大な敷地内に果たしていくつ建物があるのやら。無数の巨大な建築物に堂々とした龍頭瓦や三蔵法師を先頭とする一隊の鬼龍子が載っています。

屋根の瓦はすべて黄色一色。中国古来の思想では、黄色は権力と富を象徴する最重要の色、帝王の色だそうです。

『鬼龍子（中国の鬼瓦）』（エドワルト・フックス著、1924年。刀江書院1964発行）には次のように書いてあります。

▽

鬼龍子の色も、決して意味のないものではない。色も、中国人の観念では特別の霊を持っている。

黄は権力、偉大さおよび富の最も頻りに用いられ、最も愛好され、最善の守護の色。帝王の色で、帝王の正装、帝王の陶器、帝王の宮殿のたいていの屋根は黄色。

緑と青は永久平和の象徴。特に緑色は、そのめざす目的が重大なので、中国人の春聯（しゅんれん＝注）に黄色とともにもっとも頻りに使われている。

赤は歓喜と多幸な生活の色。

黒は破壊、壊滅の色。敵の陣列に破壊と壊滅を与える英雄の乗馬は黒。喪の色は、中国では白色である。中国人は白布を振って死者の霊を生き返らせようとする。白色は純潔と光明の色。

（引用者・注）春聯＝春節（旧正月）の風習の一つ。縁起の良い対句を書き入口などに貼る赤い紙。

△

故宮内の九龍壁は巨大な龍の壁画を9枚並べたものです。

その中に日本流の鬼瓦のデザインの元になったのではないかと思いたくなるような顔の龍の絵がありました。同様の壁画は、瀋陽の故宮にもあるそうです。



北京 故宮 九龍壁の1つ

（つづく）

